

2011年度 東京蜘蛛談話会 12月例会

1. 日時 2010年12月4日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より、「学 03 日赤医療センター行」バスにて約5分、「國學院大學前」下車，徒歩1分，170円
3. 連絡 当日は，東京環境工科専門学校の電話が使用できないので，緊急時には以下に連絡ください．加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター，OHP 等用意いたします．
5. 講演をご希望の方は，演題と使用希望機材
(スライド，OHP，コンピュータ)
を事務局初芝までお知らせください．
〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社エコシス 初芝伸吾
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

渋谷駅東口から徒歩 15 分です．坂道がありますので，バスを利用した方がよろしいか
と思います．

東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません．



東京環境工科専門学校

東京蜘蛛談話会 2011 年度採集観察会

1. 期 日： 第 3 回 10 月 9 日（日） 第 4 回 2 月 12 日（日）
2. 場 所： 八王子城址
3. 集 合： JR 高尾駅北口 10 時集合
4. 世話人： 初芝伸吾・甲野 涼

京王バスで霊園前下車，20～30 分程度で現地に着きます（以前の横沢入りまでの徒歩と同じくらいの距離です）．歩くのが面倒な方は，タクシー（相乗り）で行くことも可能だと思います．連絡先初芝携帯 090-6156-8378

クモが出てくる子どもの本情報 (6)

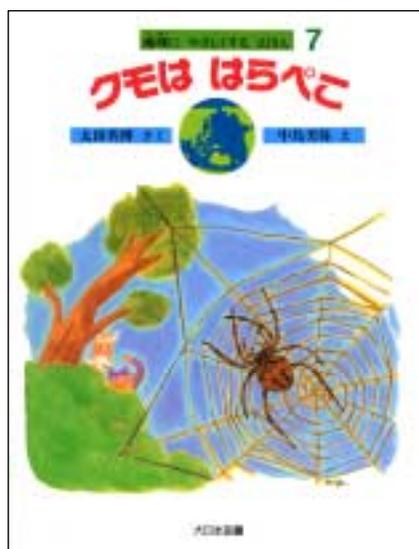
今のうちに買っておこう！その 2

1990 年代-2000 年代初頭に出版された絵本 4 点の紹介

萩野 康則

買うなら今！のクモの児童書紹介，第二弾である．

今回は 1990 年代から 2000 年代初頭に出版された絵本 2 点，漫画 1 点と読みもの 1 点を紹介させて頂く．4 点とも 2011 年 7 月 15 日現在，出版社に在庫があることを確認している．



太田 英博（作）・中島 美弥（絵）「クモははらぺこ」

B5 変判/32pp. 大日本図書 1993 年 3 月発行
ISBN978-4-477-00334-4 本体 1,262 円

環境を考える第一歩にしたい，自然との共存の大切さを伝えたい，と作者が思いを込めて企画された，小学校低学年向けの「地球にやさしくするえほん」シリーズ全 10 冊の一冊である．全冊を読むと，とても良く考え，練りに練って作られたことがひしひしと伝わってきて，産経児童出版文化賞推薦を受賞した，というもうなずける．

各冊一話完結なのだが，はなまるという名の少年が忍者塾で 1 年間修業をして自然とのつきあい方を習得する，という設定は全冊に共通している．このことはカバー裏に書かれているが，小さな読者はなかなかそこまでは読まないし，図書館の本などではカバーが外されていることが多い．従って 7 冊目の本書を

いきなり読むと、場面設定が分かりにくいかもしれない。1冊目の「カゲロウのけっこんしき」（井上正治/絵）を先に読んでおくと、状況が分かりやすい。メッセージ性がかなりストレートに表現されているので、10冊全部を読むと、いろいろな「地球にやさしくする」切り口があることが理解されると思う。ただし、文は10冊全て太田英博さんが書かれているが、絵は5人の方がそれぞれ1～3冊を受け持って描かれている。そのため、本によって画風が違い、同じ登場人物の姿も全く異なっている。それが魅力とも言えるのだが、複数冊を読むとその不整合性にやや戸惑うかも知れない。

はなまる少年が、師匠の言いつけで畑に行く途中、林の中で大きなクモが網を張っていた。汗を流して畑仕事を終えて戻ってみると、クモは網を張り終え、網の真ん中で獲物がかかっているのを待っている。塾にもどったはなまるは、「人間は食べるために苦労して畑で作物をつくるのに、クモは網を張って待っているだけで餌にありつけるのだから、楽でない」と不平を言う。ところがクモの網をずっと見ていると、ハナアブは網に気付いて避けるし、折角かかったチョウも、翅をばたばたさせて逃げてしまう。あげくには鳥に網を壊され、張り直しをする始末で、獲物はなかなか掛からない。クモも大変なんだな、とはなまるは気付くのであった。家に帰る途中の路上では、ネコやカラスがゴミを荒らし、残飯が散乱している。「にんげんはこんなにたべものをむだにしていたのか。クモがしたらおこるだろうな」とのはなまるのつぶやきに、本冊のテーマが集約されている。

さて、登場するクモは、オニグモ類であると同定できる程度に、かなり正確に描かれている。ところが網については、水平円網に見える画面が多い、橋糸がない、枠糸が不自然な多角形になっている、足場糸の間隔が狭すぎるなど、クモ屋が見たらかなりイライラする部分もある。まあ、そこまで追究するタイプの本ではないので、あまり目くじらは立てないことにしたい。

作者の太田英博さんは、NHKで長年教育番組の制作に携わっていた方である。NHK退社後、フリーでビデオ制作を続けるかたわら、幼児向け絵本の企画にもかかわるようになる。本シリーズが児童書デビュー作である。

絵の中島美弥さんはイラストレーターで、書籍・PR誌・雑誌・CD等の装画や挿絵を数多く手がけられており、個展やグループ展も多数開催されている。また、1997年には和田誠さんに推挙されたイラストレーター22人のうちの一人として、アムネスティ・インターナショナル日本支部から依頼されたポスターを製作している（アムネスティ・インターナショナル日本支部/編「地球はひとつ アートによる世界人権宣言」、金の星社、1998年所収）。絵本作品としては、本作以外に「やさしい魔法の使い方」（泉英昌/文、角川書店、1993年）がある。刷毛目を効果的に使った、優しいタッチのイラストが印象的である。YouTubeに「Miya's works」<<http://www.youtube.com/user/suzuyaemon?gl=JP&hl=ja>>という4分程度の動画をアップされている。アトリエや制作現場、それに中島さんの作品観などが紹介されていて、興味深い。

宮沢 賢治（原作）・ますむら ひろし（作画）「ますむら版宮沢賢治童話集 カイロ団長
／洞熊学校を卒業した三人」

A5 判/204pp. 偕成社 1999 年 10 月発行 ISBN978-4-03-014810-9 本体 1,200
円

宮沢賢治の原作の文章を一切変えることなく漫画化した意欲作で、最初コミック誌に連載発表されたものを単行本化したものである。童話と銘打ってあるので本稿で紹介させて頂くが、必ずしも子ども向けの内容ではない。

私がこの本の存在を知ったのは、2000 年の 11 月である。当時、吉田真さんからの質問投稿に端を発して、メーリングリスト「クモネット」上を、クモに関する図書の情報が多数飛び交っていた。その際に池田博明さんが投稿されたりリスト中に、本書があったのである。二作品が収められているが、クモが登場するのは「洞熊学校を卒業した三人」の方である。

名前だけは知っているが、実際には読んだことが無い作品や作家というのが、誰にでもあるものである。私にとって宮沢賢治は、まさにそんな作家の一人である。読んだことがある作品は小学校の授業で読んだ「セロ弾きのゴーシュ」だけで、あと名前を知っているのは「銀河鉄道の夜」くらいのもの。そのロマンティックなタイトルから、私は宮沢作品は、少年の心のような、純粋で美しいものばかりであると、勝手に決めつけていたのであった。

近所の図書館で借りて、実際にますむら版の「洞熊学校を卒業した三人」を見たのは、1 年後の 2001 年末のことであった。私はそのあまりのグロテスクさに動揺した。宮沢賢治がこんな不気味な物語を書くはずがない、これはますむらさんが相当脚色しているに違いない。そう思った私は、次の日図書館にとんで行って、宮沢賢治全集に収められている元の作品「寓話 洞熊学校を卒業した三人」と読み比べてみた。驚いたことに、両者の文字情報は一言一句違っていなかったのである。ますむらさんは実に誠実かつ正確に、原作を漫画化していたのだ。

本作は「蜘蛛となめくぢと狸」という作品を大幅に改作したもので、内容は題名通り、洞熊（ほらくま）が先生をつとめる学校を卒業した三人の物語である。この洞熊は、絶滅したホラアナグマのことではない。アナグマを指す、という説もあるが、アナグマではタヌキと大きさが変わらず、先生としての貫禄がない。賢治が熊に「ウソ」を示す「ホラ」と同音の「洞」を連結した造語と考えるのが妥当だろう。ますむらさんもアナグマではなく、ツキノワグマのように描いている。

卒業した三人とは赤い手の長い蜘蛛、銀いろのなめくじ。顔を洗ったことのない狸で、洞熊学校では「大きいものが一番立派だ」と教え込まれた。そんな彼らが卒業後に、お互いを出し抜いて自分が一番大きくなるとうとする素行と、その結果たどり着く惨めな結末を一人ずつ順に語っていく。大きくなるために三人とも、一所懸命に食べるのだが、その食べるものと食べ方が凄まじい（特になめくじ）。想像力の貧困な私は、文章を読んだだけ

では場面が頭に浮かばないので、賢治の原作を読む分には、ちょっと残酷だけれど風刺の効いた、飄々とした文章だな、程度にしか感じない。ところが、ますむら版の漫画になると、食事前には読まないほうが良いと思うほど、ものの見事に気色悪いのである。文章だけから、これだけリアルに情景を絵に再現してしまうのだから、ますむらさんはただ者ではない。

ところで、漫画もさることながら「あとがき」がまた、秀逸なのである。サブタイトルに「赤い手長の蜘蛛をさがして」とあるとおり、原作からは正体の分からないこの蜘蛛を、いかに描くべきかをどのように追究したか、その過程をかなり細かく記述しているのだ。まず宮沢賢治記念館に問い合わせたが分からない。しかしその際、ますむらさんの出身高校の美術クラブの先輩が、雪迎えの錦三郎さんの子息であることが判り、その先輩に取り次ぎを依頼したが、残念ながらご尊父は世界された後だった、そこで神保町に出掛けて、クモが載っている図鑑を3冊買って、家に帰って調べても埒があかない(それにしても、ここで出てくる「オオコガネグモ」とは、一体何であろう?)。最後には、萱島泉先生にまで質問されているのだ。そんなクモはいません、との萱島先生の回答に大いに落胆し、イシサワオニグモをモデルに描かれてはいかがですか、との勧めに従ってそのように描いてはみたものの、それでもさらに、ひょっとして正体は別の種なのでは、との述懐が続く。この粘着性に私は大いに共感する。

原作の宮沢賢治は今さら言うまでもなく、岩手県出身の日本を代表する童話作家・詩人。童話に「注文の多い料理店」「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」など、詩に「雨ニモマケズ」などがある。また、岩手県をモチーフとした架空の理想郷イーハトヴが有名である。

作画のますむらひろしさんは、山形県米沢市出身の漫画家。ヨネザアド大陸のアタゴオルという、賢治のイーハトヴの影響を受けたと思われる架空の土地を舞台にした一連の作品群を、1976年以來ずっと発表し続けている。現在は、奇しくも私と同郷の千葉県野田市在住で、野田市出身・在住者中では元AKB48の大島麻衣嬢とならんで、おそらく最も知名度の高い人である。アタゴオルという地名は、市内を走る鉄道の東武野田線愛宕駅に由来している。代表作に「アタゴオル物語」(「ますむら・ひろし作品集 第1期」1-6巻、朝日ソノラマ、1987-88年)や第26回日本漫画家協会賞大賞受賞作の「アタゴオル玉手箱」(偕成社ファンタジーコミックス全9巻、1986-96年)がある。また宮沢賢治に傾倒し、今回紹介した作品以外にも「セロ弾きのゴーシュ」(マンガデュオ、1983年)「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」(いずれも朝日ソノラマ、1983年)などを漫画化してい



る。その業績により、第 11 回宮沢賢治学会イーハトーブ賞を受賞されている。漫画以外の著書としては、自己の宮沢賢治体験を綴った「イーハトーブ乱入記」（ちくま新書、1988 年）がある。なおビートルズの熱狂的なファンで、バンドでギターを演奏するという一面もお持ちである。

M. B. グレアム（作・絵）・ともの ふゆひこ（訳）「ヘレン、ようこそどうぶつえんへ」
B5 変判/32pp. キッズメイト 2000 年 6 月発行 ISBN978-4-907822-00-2 本体
1,200 円



原書は "Be Nice to Spiders" という題名で 1967 年に出版されている。日本語訳は最初トモ企画から 1989 年に発行されたが絶版となり、その後キッズメイトから全く同内容で再刊されたものが本書である。

ビリー少年はヘレンという名のクモを飼っていたが、ペットお断りの住まいに引っ越すことになった。そこでビリーはマッチ箱にヘレンを入れて、ヘレンの世話を宜しく、と書いた手紙を添え、動物園の門の前に置いた。マッチ箱と手紙は園長に見えられたが、園長が箱を開けたすきにヘレンは逃げだし、木に登り、屋根の煙突から動物園に入る。そこはライオンのおりだったが、ライオンたちはたくさんのうるさいハエに悩まされていた。ヘレンは早速網を張り、ハエを食べ出した。一週間もするとハエはいなくなり、ライオンたちは大喜びである。次はゾウのおり、その次はシマウマと、ヘレンは順番におりを回っては、そこにいるハエを食べつくす。こうして、動物園中の動物たちが快適に過ごせるようになった。ところがある日、市長が視察に来ることになった。園長の命令で、汚らしいクモの巣は全て取り払われてしまう...

結末はお決まりのハッピーエンドのストーリーで、ほのぼのとした絵とあいまって、安心して読める/読ませられる絵本になっている。しかし大人の代表である園長の官僚主義と俗物さ加減を風刺しているところは、なかなかしたたかである。

登場するクモは、満腹のクロマルイソウロウグモの胴体に、スマイリーフェイス（ニコちゃんマーク）の顔をつけたような、この手の絵本にありがちな、かわいいものである。一方、網の張り方を順を追って説明しているページもあるが、こちらはかなり正確である。「クモははらぺこ」はクモは正確で網はいい加減だったが、こちらはその逆である。

作者のマーガレット・ブローイ・グレアムは、カナダ生まれの絵本作家・挿絵画家。「ベンジーのふねのたび」（わたなべしげお/訳、福音館書店、1980 年）などのベンジージ

リーズの作者であり、夫である絵本作家ジーン・ジオン文の「どろんこハリー」（渡辺茂男/訳，福音館書店，1964年）などのハリーシリーズの絵を描いている，これらの作品では，鉛筆やパステルなどの乾燥系の画材を使った線の太いほのぼのした画風である．登場人物の表情も，実に親しみやすい．これに対してカルデット・オナー賞受賞の「あらしのひ」（C. ゴロトウ/作，松井るり子/訳，ほるぷ出版，1995年）では，ペン画に水彩の，かなり写実的な絵を描かれている．

訳者のともものふゆひこ（友野冬彦）さんについては，詳細は不明だが，出版社トモ企画におられた方の方である．本書の他にトモ企画から「まいごのくまみつけた」「まよなかのできごと」（いずれもD. マクフェイル作）を訳している．

E. B. ホワイト（作）・G. ウィリアムズ（絵）・さくま ゆみこ（訳）「シャーロットのおくりもの」

A5 判/223pp. あすなる書房 2001年2月発行 ISBN978-4-7515-1889-2 本体1,500円

さて，今さらながら「シャーロットのおくりもの」である．1952年に "Charlotte's Web" のタイトルで出版されて以来，本国アメリカだけで1000万部以上，全世界では4500万部も売れている，児童文学の大ベストセラーである．アメリカの小学校の学級文庫には必ず収められているという．1973年と2003年にはアニメーション映画化されているし，2006年に実写版の映画が公開されたのは，まだ記憶に新しいところであろう．

舞台はアメリカの田舎の農場で，主人公はクモのシャーロットとブタのウィルバー，そして農場主の娘である少女ファーンである．小さく生まれたために農場主に間引かれそうになった子ブタ．ファーンは斧をもった父に必死に食い下がり，殺すのを止めさせる．彼女は子ブタにウィルバーと名付け，ミルクを与えて育て，少し大きくなったところで親戚の農場に引き取られる．新しい農場には話し相手となるガチョウや羊がいたが，いつもつきあってくれる訳ではない．寂しくなったウィルバーが泣いていると，「わたしお友だちになってあげる」との声がする．しかし声の主の姿が見えない．上から聞こえてくる声を頼りに探し，やっとのことで戸口の上隅に網を張っているシャーロットという名の灰色のクモを見つけた．理知的で思慮深いシャーロットは，無邪気なウィルバーに母親のような態度で接し，すぐに親友同士になる．

ウィルバーは順調に育っていった．ある日，意地悪な羊が「おまえは大きくなったら殺されてベーコンやハムになるのさ」と，「真実」を教えてしまう．



動転し、泣き叫ぶウィルバーにシャーロットは「おとなしくして！あなたはわたしが助けてあげる」と告げる。塾考の末に彼女が思いついたのは、人々に奇蹟を信じさせる、クモならでは？の巧妙な方法であった…。

本国アメリカでロングセラーとなっているのは、多くの読者に支持されている証拠であるが、正直なところ私は、読後感があまり良くなかった。いきなり斧を振り上げてブタを殺そうとするところから物語が始まるのは、いかにも狩猟民族の国らしいが、私には違和感があった。また、奇蹟が重要な役割を果たすのも敬虔なクリスチャンにはグッとくるのかも知れないが、宗教心の薄い私にはピンと来ないのである。最後に訪れるウィルバーとシャーロットの別れも、私には格段悲しいものには感じられなかった。この落差はアメリカ人と日本人の国民性の違いによるものだろうと、都合良く考えていた。ところが、ネットで紹介記事や感想を見ると、日本人でも多くの読者が感動した、泣いた、と書いている。どうやら私の感性がひねくれているらしい。私が一番しみみりしたのは、シャーロットの子グモがバルーニングで分散していくところだった。

挿絵では、シャーロットの網は、立派な垂直正常円網であるが、クモ自体は足の長い、華奢な、ヒメグモのようなクモとして描かれている。このクモの正体は？と詮索したくなるが、実は本文中でちゃんと示されているのである。シャーロットがウィルバーに名前を尋ねられたときに「シャーロット・A・キャヴァティカっていうの」と言っているが、この「A・キャヴァティカ」は "A. cavatica", つまり学名の *Aranea cavatica* (= *Araneus cavaticus*) から取っているのである。Platnick のカタログを見ると、確かに *Araneus cavaticus* という種が存在し、北米に分布していることが判る。英名は "bark spider" で、bark は納屋だから、まさにこの物語にはぴったりのクモである。作者ホワイトはクモの種まで意識して作品を書いたのである。しかし、絵を描いた名手ウィリアムズも、さすがにクモの種までには執着せずに、自身が持っていたクモのイメージで作画してしまった、ということであろう。なお、この種に和名があるかどうか、谷川明男さんに伺ったところ、和名はまだついていないようである、とのことだった。

作者のエルウィン・ブルックス・ホワイトは、雑誌「ニューヨーカー」のライター、編集者として数々の評論・詩・小説を発表した方である。児童文学の分野での作品は本書と「ちびっこスチュアート」（原題 "Stuart Little", G. ウィリアムズ/絵, 1945 年。日本語版は鈴木哲子/訳, 法政大学出版局, 1975 年 [2000 年に「スチュアートの犬ぼうけん」としてあすなろ書房からさくまゆみこによる別訳発行]）「白鳥のトランペット」（E. フラスチーノ/絵, 1970 年。日本語版は松永ふみ子/訳, 福音館書店, 1976 年 [2010 年福音館文庫として再発行]）の 3 点のみであるが、いずれも高く評価されており、1970 年には長年にわたってアメリカ児童文学に多大な貢献をした作家・画家に贈られるローラ・インガルス・ワイルダー賞を、1978 年にはピューリッツァー賞特別賞を受賞している。

絵のガース・ウィリアムズはアメリカを代表する絵本作家・挿絵画家。自身の絵本作品

としては、「しろいうさぎとくろいうさぎ」（まつおかきょうこ/訳，福音館書店，1965年）などがある。また、「おやすみなさいフランス」（R. ホーバン/文，まつおかきょうこ/訳，福音館書店，1966年）など，他作家の絵本の絵を描いたほか，「大草原の小さな家」を初めとする「インガルス一家の物語」シリーズ（L. I. ワイルダー/作，恩地三保子/訳，福音館書店，1972-73年）など，多数の物語作品に挿絵を描いている。絵本の絵ではペン画に鮮やかな彩色を施したものもあるが，何と云ってもこの人の持ち味は鉛筆画に淡い水彩で色をのせた，やさしい柔らかな画風にある。特にげっ歯類系哺乳類の顔，とりわけ口の周りの表情の巧みさは，見事としか言いようがない。挿絵作品も，これが児童向け読みものの挿絵の見本である，と云いたくなるような，実に味わい深いものである。

訳者のさくまゆみこさんは本誌 130 号の「クモが出てくる子どもの本情報 (4)」でも紹介したとおり，出版社の編集者を経て，翻訳家になられた方で，主として児童文学の分野で，膨大な数の作品を翻訳している。

ところで本書は，さくまゆみこ訳版が出る前に，同一書名で鈴木哲子訳版が出版されている（法政大学出版局，1973年）。ところが，私が所有するこの鈴木訳版の奥付を見ると，「1973年8月10日 新装版第1刷発行」と書かれている。新装版とあるからには，その前の版があるはずで，私なりに図書館やネットでしつこく探したのだが，その実体は判らなかった。ある日，別件で千葉県立中央図書館の児童資料室に行った際に，いつもお世話になっている司書の平塚明子さんに「鈴木哲子訳の『シャーロットのおくりもの』の新装版の前の版が見つからない」と話したところ，翌日平塚さんから連絡が入った。なんと "Charlotte's Web" が「こぶたとくも」というタイトルで，原書が出版された僅か1年後の1953年に，新装版と同訳者・同出版社で翻訳出版されていることを突きとめてくださったのだ。さすがは図書館職員である。タイトルが違っているのでは，私がいくら検索を掛けたところで引っ掛からないはずである。さっそく「こぶたとくも」を入手して新装版と較べたところ，判型が小さいことと，一部単語が漢字か仮名書きかの違いがあるものの，間違いなく同訳・同内容であった。

それにしても "Charlotte's Web" を「シャーロットのおくりもの」としたのは，実にセンスの良い意識だと思う。「こぶたとくも」（これもある意味ですごい意識だと思うが！）が「シャーロットのおくりもの」になったいきさつについて，法政大学出版局に問い合わせたところ，誠実に回答してくださった。誰が訳したかは特定できなかったものの，1973年にアニメ映画化された時の邦題が「シャーロットのおくりもの」であった，という貴重な情報が得られた。なるほど，映画の配給会社なら「シャーロットのおくりもの」という，気の利いたタイトルを考えそうである。そしてこの映画の日本公開日が1973年8月25日，鈴木哲子訳新装版の発行日が1973年8月10日である。映画公開に合わせて日本語タイトルも改題して，原作本として売り出した，といったあたりが真相ではないかと推察している。

原書と両訳版をくらべてみると，鈴木訳の方が原文にかなり忠実に訳しているのに対し

て、さくま訳はやや意識が多い印象をもった。動植物名はさくま訳の方がより正確に訳されているようである。また、鈴木訳の方は50年以上前のものだけあって、やや古めかしく、その分、農場の雰囲気が出ているかもしれない。しかしさくま訳の方が今風で洗練されているので、現代の読者にはこちらの方が親しみやすいだろう。

なお、英語版もハード、ペーパー交えて、何点も新刊として入手可能である。原書で味わいたいという方には、1952年のオリジナルと基本的に変わらないハードカバー版("Charlotte's Web", HarperCollins, 1999年, ISBN978-0-06-026385-0, 1,500円程度)か、原書のG. ウィリアムズの線画にR. ウェルズが彩色を施した、フルカラーのペーパーバック版("Charlotte's Web (full color)", HarperCollins, 2001年, ISBN978-0-06-441093-9, 650円程度)をお薦めしたい。また、講談社インターナショナルから出ている文庫版(講談社英語文庫 KEL-182「シャーロットのおくりもの」, 2006年, 本体780円)は巻末に訳注があるし、大きさも手頃なので、英文読解の練習をしたい中高生(もちろん大人でも)に好適である。

さらに、2006年版の映画は、「シャーロットのおくりもの スペシャル・コレクターズ・エディション」(97分, パラマウント ホーム エンタテインメント ジャパン, 2007年, ASIN: B000VXXN8W, 販売価格税込み 1,500円)としてDVDが発売されているので、劇場公開時に見ていない方は是非どうぞ。実はかく言う私も、今ごろになってDVDで初めて見たのである。ツッコミを入れなくなる箇所は多々あるものの、結構感動してしまった。本を読んでもあまりピンと来ないのに、映像ではジーンとした、というのは、「洞熊学校を卒業した三人」のところでも記したように、要するに私の想像力が貧困であるために他ならない、と悟ってしまった。

クモが出てくる子どもの本情報(7)

2010-11年に出版された児童書3点と雑誌1点の紹介

萩野 康則

今回は2010年と2011年に出版された児童書3点と雑誌1点を紹介させて頂く。

北村 雄一(文・絵)生きもの摩訶ふしぎ図鑑「忍者生物摩訶ふしぎ図鑑」

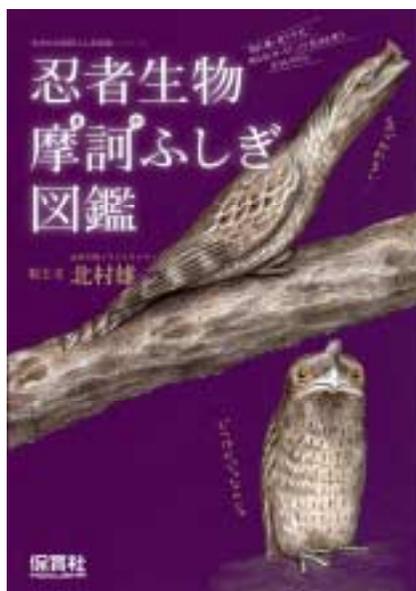
四六判/128pp. 保育社 2010年1月発行 ISBN978-4-586-31303-7 本体1,800円

不思議な生物に焦点をあてた「生きもの摩訶ふしぎ図鑑」シリーズ中の1冊で、深海魚、昆虫、極限生物に続く4冊目にあたる。

文と絵の北村雄一さんは、農獣医学部出身のサイエンスライター兼イラストレーターで、恐竜や極限環境に住む生物(特に深海生物)、系統や進化に関する著作が多い。著書に「深

海生物図鑑」(同文社,1998年),「極限生物摩訶ふしぎ図鑑」(保育社,2008年),2009年科学ジャーナリスト大賞受賞の「ダーウィン『種の起源』を読む」(科学同人,2009年)などがある。

私はこの本を手にとったとき,内容よりもまず出版社名を見て驚いた。倒産したはずの保育社から新シリーズが出ているなんて!調べてみたところ,保育社は確かに1999年に倒産したものの,2007年に別の会社の子会社として再建していたのだ。倒産中も出版社や書店などの支援を受け,原色図鑑シリーズなどは増刷・販売が続けられていたが,新会社として再スタートを切ったことで,新企画の出版も始まったようである。



本書のタイトルになっている「忍者生物」とは,あたかも忍者が忍術を使うように,特殊な姿や動きで身をくらましたり,思いもよらない技をみせる生物のことである。これらの動植物を,各見開き2ページで,精密な美しい色鉛筆によるイラストと,わかりやすい解説文で紹介している。全体は「隠れ蓑の術」「成りすましの術」「待ち伏せの術」「びっくり忍法」の4つの章からなっていて,最初の3章は擬態を扱い,最後の章で防御や補食などのための特殊技能を取り上げている。

全部で56種の忍者生物が登場するが,そのうちクモは「待ち伏せの術」の章のゴールデンロッドクラブスパイダー(黄色い体でセイタカアワダチソウの花に紛れる)とヘリジロツケオグモ(鳥のフンに成りすます),それに「びっくり忍法」の章のナゲナワグモ(匂いで獲物をおびき寄せ,投げ縄で仕留める)とメダマグモ(大きな眼で獲物を察知し,投網で捕らえる)の4種である。

ゴールデンロッドクラブスパイダーは,解説文や文末の種の説明欄によれば,北米に分布する全身が黄色のハナグモのなかまで,学名は *Misumena vaita* ということになっている。そうか,日本にはいないんだな,と思いつつ,まずは谷川さんの「日本産クモ類目録」で "*Misumena*" を検索してみる。あった。ヒメハナグモと同属だ。次に Platnick の "The World Spider Catalog" を調べる。"*Misumena vaita*" は見つからず,その代わりに "*Misumena vatia*" があった。分布は "Holarctic" であり,シノニムリストには Yaginuma, Chikuni, Ono など,日本人研究者の名前も散見される。そこで谷川さんの目録に戻ったところ,ヒメハナグモの学名は *Misumena vatia* であった。念のため "goldenrod crab spider" と入力して Google 検索したところ, "Goldenrod Crab Spider (*Misumena vatia*)" という文字列を含むページがたくさんヒットした。間違いない,ゴールデンロッドクラブスパイダーは日本にいるヒメハナグモと同種で,しかも学名の種小名を誤記しているのだ。この種は色彩変異が大きく,図鑑やネット画像で紹介されている

個体は白色型や白色赤班型のもののほうが多いかもしれない。しかし千国図鑑には本書の図にそっくりの黄色型の個体が載っている。もう少しよく調べて日本にも分布する種であることを突きとめた上で、馴染みのない英名のカタカナ表記ではなく、ヒメハナグモとして書いてほしかった。あるいは「ゴールデンロッドクラブスパイダー＝ヒメハナグモ」とご存知の上で、北米の事例であるために、敢えてそのようにされたのだろうか。

また、ナゲナワグモの項では、北米産の正真正銘のナゲナワグモ *Mastophora cornigera* を取り上げて、「日本にもいるトリノフンダマシというクモの親戚」と説明しているが、日本にも投げ縄行動をするイセキグモ類がいるのだから、こちらも紹介してほしい。

このように、ことクモに関しては記述にやや詰め甘さがあるが、全体としては大変丁寧に作られた本で、大人が読んでも実に面白い。と言うよりも、児童書というよりはむしろ大人向け（中学生以上程度）の内容だと思う。

D. クローニン（文）・H. ブリス（絵）・もりうち すみこ（訳）「クモくんのにつき」
B5 変判/32pp. 朔北社 2010年6月発行 ISBN978-4-86085-084-5 本体 1,500円

近所の図書館に行った際に、顔なじみの司書さんが「今度こんな本が出ますよ」と、本書のことを紹介してくださった。そのとき私は、もうこの本を持っていたような気がして、訝しく思ったのだが、自分の書棚を見て納得した。「ミミズくんのにつき」（D. クローニン/文，H. ブリス/絵，もりうちすみこ/訳，朔北社，2005年）という、本書と同じ文＋絵＋訳のトリオの本が、同じ出版社から出ていたのだ。私が既に所有していたのはこちらだったのである。

タイトル通り、主人公クモくんの周囲で起こる日々の出来事を、絵日記風に描いている。

孫の授業参観に老クモ夫婦が来たり、クモの最大の敵である掃除機から逃れる訓練をしたり、公園でシーソーで遊ぼうとしたが上手くいかなかったり、おじいさんグモがパリに旅行に行ったり...。思わずクスツとしてしまうページが満載である。

登場するクモは、全身が黄土色で、ころころして、クモというよりは足を長くしたササラダニ、特にイレコダニのようである。おまけに体は頭・胸・腹に分かれているし、頭には「つの」のようなものまで生えている。触肢のつもりだろうか。さらに、糸から懸垂したときの体位が垂直ではなく水平になっているのだ。クモの絵本はたくさんあるが、その中でも本書のクモ描写の正確さはトップクラスで



あろう。にもかかわらず、内容が愛らしいために、それらの疵も気にならない。

なお、文中に「アシナガグモ」という語が 3 回出現するが、この正体が気になった。絵ではクモくんをそのまま巨大にして足を長くしたように描かれているのだが、絵があてにならないのは既に明白である。となると原文の単語を見るしかない。幸い千葉県内に原書を所蔵する図書館があったので、取り寄せて確認したところ、原文では "Daddy Longlegs" となっていた。この単語は英国ではガガンボを、米国ではザトウムシまたはユウレイグモを指すようなので、ここでの「アシナガグモ」は誤訳である。クモくんの怖れの対象となっているという文脈から考えて、これは「ザトウムシ」と訳すべきだろう。

文のドリーン・クローニンは、弁護士で絵本作家という、珍しい経歴の方である。彼女の絵本作家としてのデビュー作は、2001 年度コールデコット賞次点作品となった "Click, Clack, Moo: Cows That Type" (B. ルーウィン/絵, Simon & Schuster, 2000 年, 日本語未訳) である。次作の "Giggle, Giggle, Quack" (同, 2002 年, 未訳) とともに、牧場主とそこで飼われている動物たちの愉快なやり取りを描いた作品で、NHK E テレで放送されているクレイアニメ「ひつじのショー」に通じるものがある。ウィットに富んだ名作で、なぜ日本語訳が出ないのか、不思議である。

絵のハリー・プリスは、アメリカの雑誌 "The New Yorker" の表紙画家として、全米で著名な画家・漫画家である。何とも言えず暖かみのある絵が気持ちを和ませてくれる。たくさんの絵本の絵を描いているが、日本語訳が出版されているものとしては、「ミミズくんのにつき」の他に「みんなのすきな学校」(S. クリーチ/文, 長田弘/訳, 講談社, 2003 年) がある。

同じクローニン+プリスのコンビで "Diary of a Fly" も出版されているが、こちらは日本語未訳である。ぜひ「ハエくんのにつき」も手にしてみたいものである。

訳のもりうちすみこ(森内寿美子)さんは、2001 年頃から精力的に児童向けの読みもの・絵本の翻訳をされている方である。人権問題に強い関心をお持ちのようで、奴隷問題や戦争孤児などを扱った、やや重い内容の本を多く訳されて、「ホリス・ウッズの絵」(P.R. ギフ/作, さ・え・ら書房, 2003 年) が産経児童出版文化賞に、「真実の裏側」(B. ナイドゥー/著, めるくまーる, 2002 年) が同賞推薦図書に選ばれている。その一方で、本書や「かしこいブタのロリポップ」(D.K. スミス/作, J. パートン/絵, アリス館, 2002 年), 「ポークストリート小学校のなかまたち」シリーズ(P.R. ギフ/作, 矢島眞澄/絵, さ・え・ら書房, 2007 年~) などの、楽しい軽い内容の本も訳されている。

北村 雄一(文・絵)生きもの摩訶ふしぎ図鑑「生きものお宅拝見！」

四六判/128pp. 保育社 2011 年 1 月発行 ISBN978-4-586-31305-1 本体 1,800 円

前出の生きもの摩訶ふしぎ図鑑シリーズの 6 冊目で、北村さんご自身が書かれたものとしては 4 冊目である。哺乳類や鳥, 社会性昆虫を中心に, おもしろい巣をつくる動物

29 種を、「わけあり，こんな家をつくりました！」「みんなでつくれ，大きなお家！」「人間も顔負けの工夫にびっくり」の 3 章に分けて，例によってきれいなイラストと簡潔な説明で，各種 4 ページで紹介している．

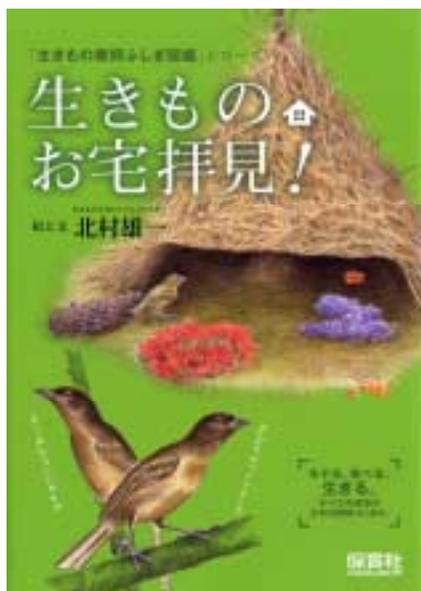
「みんなでつくれ」の章は，タイトルからも想像がつくように社会性を持つ動物たちが主役で，シロアリ 1 種，ハチ・アリ類 6 種，地中性のげっ歯類 2 種に加えて，南米産のムレアシプトヒメグモが登場している．他の動物はそれぞれユニークな巣や複雑な構造の巣を作っている中，ムレアシプトヒメグモの住居はやや見劣りがするし，実際解説文も網よりはクモの習性の説明に重点が置かれている．これは著者がクモにも社会性をもち，共同生活をするものがある，ということに驚き，これを読者に伝えたかったためではないだろうか．集団で獲物を倒すこと，他クモの子も含めて群れで子育てをすること，網が大きくなりすぎると重みで網が分断され，それぞれが新しいコロニーになることなどが，分かりやすく書かれている．

本書に出てくるクモはこの 1 種のみで，4 種も取り上げられている「忍者生物」と較べるとちょっと寂しい気がする．トタテグモ，ミズグモ，ジョウゴグモ，イワガネグモ等々，取り上げるに値する面白い住居をつくるクモは，まだ他にもいると思うのだが．しかし，まだあまり馴染みのない社会性のクモを紹介してくれた功績は大きい，と言ってよいだろう．

ところで近年，「へんないきもの」(早川いくを/著，寺西晃/絵，バジリコ，2004 年)，「またまたへんないきもの」(同，2005 年)，「とってまへんないきものたち」(小宮輝之/監修，へんなもの解明学会/編，辰巳出版，2005 年)など，変わった生物を紹介する「トンデモ生物本」が何冊か出版されている．これらの本は，活字を太字にしたりポイントを上げるといった手法も駆使して，変わった生物の変わっている部分を極端に前面に出す書き方がされており，内容も碎け過ぎ，もっと

言ってしまうばふざけ過ぎの嫌いがある．また，絵もおどろおどろしさを強調して描かれているものが多く，科学的書物というよりはどちらかというと当時流行っていた TV 番組「トリビアの泉」的な，雑学娯楽的要素が強いのが特徴である．

これまでに北村さんが本シリーズに書かれた 4 冊は「深海魚摩訶ふしぎ図鑑」「極限生物摩訶ふしぎ図鑑」「忍者生物摩訶ふしぎ図鑑」「生きもののお宅拝見！」で，2008 年から毎年 1 冊ずつ刊行されている．これらの 4 冊も「トンデモ生物本」の系列上にある，と見なすことも可能であろう．確かに 1 冊目の「深海魚」は，説明文に太字や大きな字を使用している点で「トンデモ生物本」の影響が認められる



し、取り上げる生物の学名を表記していない点や、「深海魚」とうたいながら実際には魚類以外の動物も多数取り上げられている点でも、やや違和感がある。しかし「忍者生物」以降の3冊は解説文の表記もおとなしくなり、学名もきちんと表記されている。インターネット時代の現代、海外のサイトで情報検索をすることを考えると、学名が載っていることは必須である。また「深海魚」も含めて、絵は変に扇動的になることなく描かれているし、解説文も実に淡々と、生物学的な内容が丁寧に書かれている。従って北村さんの4冊は「トンデモ生物本」とは一線を画していると思なすべきだろう。もし機会があれば、クマムシの項を「へんないきもの」(pp.52-53)と「極限生物」(pp.24-25)で較べられるとよい。その違いは歴然である。

この保育社のシリーズ、2011年8月30日現在で合計9冊が刊行されている。中には「暗闇の生きもの摩訶ふしぎ図鑑」(見山博/文・絵、2011年7月)などという、いかにもクモが登場していそうなタイトルもあるが、残念ながら現物をまだ見ていない。内容を確認した上で、いずれ紹介できればと考えている。

遠藤 知二(文)・岡本 よしろう(絵)「まちぼうけの生態学 アカオニグモと草むらの虫たち」 たくさんのふしぎ 2011年8月号

B5変判/40pp. 福音館書店 雑誌コード 15923 税込 700円

私の座右の書の一冊に、トビムシ分類の世界的な大家だった故吉井良三博士の「洞穴学ことはじめ」(岩波新書、1968年)がある。その中に、著者が京都帝国大学理学部に入学して間もない頃、動物生態学研究者のトンボの野外調査について行った際の述懐がある。池でトンボを1匹捕まえ、糸をつけて放す。他の1匹が近づいてきて接触したのを確かめてから最初のトンボを再捕獲し、腹端に香水をふりかけてまた放す。香水のにおいがあったら交尾をするかどうかを確認する実験だったのだが、これに対して吉井博士は「私はおどろいた。これは、なんとという変わった科学であろうか。これが、生態学という学問に対する私の最初の印象であった」と記している。

小学校中学年向けの月刊児童雑誌「たくさんのふしぎ」に今回掲載された「まちぼうけの生態学」には、この古き良き時代の生態学の香りがぶんぶんする。

9月のある日、動物生態研究者である遠藤知二さんが、北海道札幌市郊外の草原に立っている。足下からバッタが飛び出したと思ったら空中で停止した。次の瞬間、黄色いクモが飛びかかり、糸でぐるぐる巻きにした。バッタはアカオニグモ幼体の網に掛かったのだった。遠藤さんはこんな見事な狩りをするアカオニグモに興味を持ち、詳しく観察するこ



とにする。

まず1頭のアカオニグモ♀幼体の網を3日間、朝から夜まで観察した。ところが予想外に獲物はなかなか掛からない。せっかく掛かっても取り逃してしまう。結局3日間で食べたのはカメムシ1頭だけであった。そこでどのくらいの虫が網の周りを飛び、どのくらい捕らえているのか、翌年に改めて調査することにした。

翌春5月。網を中心とした空間に一辺1メートルの立方体を設定し、その内に入った虫を10分間カウントする。1つの網が終わったら次の網で同じことをする。これを朝から晩まで繰り返し、5月から9月まで調査を行った。10分の観察をのべ380回！行った結果、網の周りを飛んだ虫は合計4678頭。このうち網に掛かったのは121頭で、47匹は逃げたので、結局クモが食べられたのは74頭だったという。しかもそのほとんどが小さなカやハエで、最初に見たバツタのような大物は極めてまれなのである。

遠藤さんはまた、キスジベッコウとの決闘についても観察されている。この狩りパチは、子どもの餌にするために網上のアカオニグモを襲うが、この際、アカオニグモは逃げ隠れするのではなく、決まって網の中央に出て後ろ4本の脚でぶら下がり、前4本の脚を広げて、ハチを迎え撃つような恰好をするのだという。狩りに成功するのは20回に1回程度の割合で、あとは失敗して飛び去っていくようだ。

圧倒的な時間と手間を掛けた観察から得られたデータには有無を言わさない説得力がある。この迫力が、子どもたちにどのくらい伝わるのかは私には判らない。しかし少なくとも私は、何か失われつつある、大変貴重なものを見たような感動を憶えた。この手間ひまを厭わない地道な観察こそが、生態学の基本であろう。

文を書かれた遠藤知二さんは、現在神戸女学院大学教授で、ハチやクモなど陸上節足動物を対象として、行動生態学や群集生態学の研究を行われている。著書に「人と自然 61話」(共著、兵庫県立人と自然の博物館、2002年)が、訳書に「延長された表現型」(R. ドーキンス/著、共訳、紀伊國屋書店、1987年)や「ブラインド・ウォッチメイカー(上・下)」(R. ドーキンス/著、共訳、早川書房、1993年)がある。因みにキスジベッコウがアカオニグモを狩る場面も出てくる「ベッコウパチのクモがり」(岩波書店、1982年)を書かれた遠藤彰さんは実兄である。

絵を描かれた岡本よしろう(義朗)さんは、山口県出身の美術家で、平面画から立体、漫画や絵本まで手掛ける多才な方である。2002年現代日本絵画展で佳作を、2003年と2008年に山口県美術展覧会で優秀賞を受賞されている。これまでも絵本は何冊か手掛けられているが、いずれも未出版で、その意味では今回が初めての絵本の仕事になる。今後は自作の絵本を出版する予定であるという。大変ほのぼのとした暖かみのある画風は、今回の作品にも実に合っている。私としては中ほどに出てくる、住居の葉の上に体育座りをして、釣りをするかのように信号糸を引いているアカオニグモと、その隣りで正座をして、網を観察している遠藤さんのツーショットの絵がお気に入りである。とっても好ましく、思わず口元がゆるんでしまう。

夏合宿の報告

萩野聡子

～ツインリンクもてぎにて～

発見メモ(1)



どんな場所にクモがいるか
考えてみたら...



1. 葉のウラ、葉がつつんである中など... (アログモ科?)
2. 枝と枝の間にあみをはる? (図1のA~Bにあみ?)
3. 沼や池など、水の近くはクモが多い?
4. この時期はまだ幼体が多い?



図. 1

これは、こんな理由からかな...?

1. 人目につきにくいから?
2. あみをかけやすいから?
3. しめっていて住みやすい?
4. 梅雨明けからそんなにたっていないから?
(合宿は関東の梅雨明けの10日ぐらい後でした。)



↓
実際に観察してみたら...

- 
1. イネのような、細長い葉
(キタヤハズハエトリが
♀♂、両方いた)
 2. 夜、コゲチャオニグモがあみをはっていた。
 3. ジョロウグモ、コガネグモの幼体がたくさんいた。
 4. 葉がつつんである所は、まかれていたので見つけやすかった。

...と、こんなことが
わかった!

↓
そして...

1. 昼間にあみをはることは、どのくらいあるの
だろうか。
2. どうして湿地が好きなのだろう。 
3. この時期の卵や、生まれる種類はどんな種類?

...なんてことを考えた...
まだまだ知らないことはいっぱい!



発見メモ(2)

観察する場所は「どんなところ」かな...?

1. 林?
2. 土手?
3. 川の近く?
4. 田んぼの近く?



... と考えてワクワク
していました。



着いたところは...

1日目

森や林にかこまれた、棚田のある所でした。

2日目

道は下りが急で、着いたのは川の近くの林(?) でした。

帰りの登り坂、大変でした。



今回、合宿に参加して思ったこと

1. 登る所がたくさんありました。(つかれた～)
2. キトンボがたくさん見られました。(キレイ!)
3. 川にはま、てしまった。氣(い)流
(長くつの中までドロだらけ…川の水で洗いました…)
4. 夜の観察では蚊がいっぱい! ビックリしました。
5. 思ったよりクモをつかまえられなかった。
6. ヘッドライトとかい中電とうで意外と明るかった。
7. ホテルがキレイ! 気持ちよかったです。(スリッパ最高!)
8. ホテルを見はく、てしま、て…残念でした。



東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円，学生 2000 円です。
郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。
会費のことは：会計担当 安田明雄 〒231-0861 横浜市中区元町 5-219
TEL：045-641-0763 E-mail：kobato@gol.com



オオトリノフンダマシ

入退会は：事務局 初芝伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203
(有)エコシス

E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：谷川明男 247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4月総会まで、8月末、12月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099

E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp

キシダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。

会員の皆さんからのご投稿をお待ちしております。

前号における編集作業ミスのお詫び

通信編集担当谷川明男

談話会通信前号(132)において、私の編集作業ミスにより、漫画「ムツゲ日誌」の4頁目(本号 p.25)が欠落してしまいました。作者の張替智行さん、会員の皆様に深くお詫び申し上げます。たいへん申し訳ありませんでした。ここにムツゲ日誌最終回を再掲載させていただきます。

ムツゲ 日誌

～最終回～

10月24日

